

職人の技

シリーズ③〇 〈日本画・屏風絵師〉

アラン・ウエスト さん

桜のつぼみが、弾けそうな笑顔で春を待つ、東京、谷中。ここにアトリエを開いて11年目になる。

「日本画・屏風絵の画材屋さんが多いので便利です。多いといっても全国に専門店は9軒で、そのうちの3軒」

専門店の数からも分かるように、日本の伝統でありながら担い手は少ない。今、その伝統を守り、未来へと続く可能性を広げているのが、ワシントンD.C.出身のウエストさんである。

伝統の継承者であることはあくまでも結果である。ウエストさんは屈託なく笑う。

「もともと日本に興味があったわけではないんです。スマイセン(笑)」

ウエストさんは、日本画に国

境という考え方を持ち込まない。日本の伝統文化に引かれたのではなく、子どものころから熱中していた植物を描くこと、その表現を追求している道の途中に日本画があった。

「美大に入つて勉強したのですが、自分が描きたいものとは違った。当時はモダニズムでないと認めてもらえない。わたしはモダニズムではなく、もっと植物を生き生きと描きたかった。このまま続けても意味があるのかなという疑問。我慢するのも、続けるのも無責任だと思つて悩みました」

ウエストさんは休学を決断。見聞を広めようとボランティア

ア団体に参加。そこで偶然にも日本への派遣が決まった。そこには、大好きな植物を描くために追い求めていたものがあつた。幸福な運命ともいべき日本と、日本画との出会いだつた。

「高校生の時、油絵を使って植物を表現していたのですが、限界があつた。それは腕だけの問題じゃなくて、素材の限界もあると思つていました」

例えば絵具に油を使う印象派の絵を、ウエストさんは「植物との親近感がない」という思いを持つていた。もつと生き生きと植物の息吹を伝えたい。

「枝の線を描こうとすると、油絵具では線がのびやかに描けないんです。サラサラした絵具が欲しい。でも探しても見つからない。それなら、作つてみるしかないと思つて、いろいろ試しました」

高校生にしてこの探究心。

与えられた形の中で懸命に挑戦していくのも尊い姿。だが、ウエストさんは自分の表現のためにその形からはみ出すことを選択した。挑み、探し、挫折し、また挑み、探す。その答えの鍵が日本にあつた。

「狩野派の筆法は、わたしの考えに近いものでした。輪郭線に生命が宿るような生き生きとした感じがある。例えば山道を歩いている時の森林浴効果を絵でも感じられるような…。形をスケッチ、再現するならば本物にも写真にも負

貫くための、出会い。

自然と二体となつて絵筆を走らせる喜び。見て描くのではない。感じたことが絵になつていく。その思いを作品に昇華させるためには画材が重要だ。ウエストさんは力強く描かれた桜の屏風絵の花弁に使われている「胡粉」を指して、ため息をつく。

「これはカキ殻が90年間、野ざらしで風雪を受け、白墨化した状態になって初めて顔料になったものです。成熟が足りないかと真っ先にはがれる。カキ殻をそのまま削ればでき



文=岩瀬 大二
text: Daiji Iwase

写真=岡本 成生
photo: Masao Okamoto



「というものではないのです」
担い手がいなければ、供給する人々もいなくなる。ピンクを表現するサンゴも減少した。取り巻く状況は楽観できないものではない。それでもウエストさんは自分の表現を、日本画・屏風絵の世界で貫く。

「日本代表」としても。
「サンクトペテルブルクのシュヴァロフスキー宮殿で歌舞伎の背景を描いたり、オランダの国際花博では、日本庭園の中でわたしが屏風絵を描いている様子がそのままパビリオンの展示物だったり（笑）。楽しいです」

入口が開け放たれたアトリエに、春風とともに聞こえてきた「こんにちは」という下町のおばさんのあいさつは、ウエストさんにとって心地よいBGM。ここで、描き続ける、幸せ。それがウエストさんの絵に現れる。



PROFILE

1962年アメリカウシントンD.C.出身。幼いころから植物を描くことに目覚め、美術学校、カーネギー・メロン大学芸術学部絵画科を経て82年初来日。1990年東京芸術大学大学院日本画科入学。以後、日本画（大和絵・屏風絵）の第一人者として国内外で活躍。個人や企業から注文制作を受け、その作品はホテルやレストラン、公共施設などに設置されている。また、スーサン・オズボーンとのコラボ、能の金春流・喜多流に舞台背景を提供など、幅広い活動を展開。作品は屏風絵、掛け軸のほか、着物や陶磁器への絵付けなど多岐にわたる。